

様式 C・7・1

平成20年度科学研究費補助金実績報告書（研究実績報告書）

1. 機関番号 3 | 2 | 6 | 9 | 2 2. 研究機関名 東京工科大学
3. 研究種目名 基盤研究(C) 4. 研究期間 平成19年度 ~ 平成21年度
5. 課題番号 1 | 9 | 5 | 2 | 0 | 3 | 7 | 0
6. 研究課題名 言語コミュニケーションを支える規範と逸脱のダイナミクスの認知語用論分析
7. 研究代表者

研究者番号	研究代表者名	所属部局名	職名
3 0 4 2 4 3 1 0	フリガナ: 岡本, 雅史	片柳研究所	客員准教授

8. 研究分担者(所属研究機関名については、研究代表者の所属研究機関と異なる場合のみ記入すること。)

研究者番号	研究分担者名	所属研究機関名・部局名	職名
	フリガナ		

9. 研究実績の概要

下欄には、当該年度に実施した研究の成果について、その具体的内容、意義、重要性等を、交付申請書に記載した「研究の目的」、「研究実施計画」に照らし、600字～800字で、できるだけ分かりやすく記述すること。また、国立情報学研究所でTeX-化するため、図、グラフ等は記載しないこと。

平成20年度は、まず前年度に統計数理研究所で報告した、潜在的人称構造に基づく発話理解モデルについて論文としてまとめ、その後イギリスはブライトン大学で開催された言語コミュニケーションと認知に関する国際学会であるLanguage, Communication, and Cognition(LCC)において報告を行った。そこでは、聞き手による比喩表現の理解プロセスにおいて、話し手の主観性が(1)事態認知者としての主観性、(2)言語表現者としての主観性、(3)行為者としての主観性、の3つの相において把握されることを、アイロニー発話、直喩とメタファーなどのレトリック表現のそれぞれの解釈について示した。

これらの研究は、本研究課題で推進する規範と逸脱の認知語用論の観点からは、発話者の事態認知と解釈者の発話事態認知の相互作用において、それぞれの事態の規範性がどのように発話理解において利用され、同時に発話理解プロセスがその逸脱をトリガーとしてどのように展開されるかを示すものとして位置づけられる。こうした試みの全体像としての認知語用論の基礎的枠組みについては現在共著書として執筆中であり、最終年度の成果として出版される予定となっている。

成果の公表を見合わせる必要がある場合は、その理由及び差し控え期間等を記入した調書(A4判縦長横書1枚)を添付すること。

10. キーワード

- (1) 認知語用論 (2) 潜在的人称構造 (3) レトリック
- (4) 語用論的主観性 (5) (6)
- (7) (8) (裏面に続く)

11. 研究発表（平成20年度の研究成果）

〔雑誌論文〕 計（1）件

著者名	論文標題				
岡本雅史	語りにおいて生起し，その理解を支える潜在的人称構造について				
雑誌名	査読の有無	巻	発行年		最初と最後の頁
北海道大学数学講究録『統計数理研究所共同研究リポート217 動的システムの情報論(7) 自然言語のダイナミズム』	無	134	2	008	pp.101-110

著者名	論文標題				
雑誌名	査読の有無	巻	発行年		最初と最後の頁

著者名	論文標題				
雑誌名	査読の有無	巻	発行年		最初と最後の頁

〔学会発表〕計（1）件

発表者名	発表標題		
Masashi Okamoto	Triple aspects of subjectivity in understanding figurative utterances: cognitive pragmatics view		
学会等名	発表年月日	発表場所	
Language, Communication and Cognition: International Conference	2008年8月7日	University of Brighton, Brighton, UK	

〔図書〕 計（0）件

著者名	出版社			
書名			発行年	総ページ数

12. 研究成果による産業財産権の出願・取得状況

〔出願〕 計（0）件

産業財産権の名称	発明者	権利者	産業財産権の種類、番号	出願年月日	国内・外国の別

〔取得〕 計（0）件

産業財産権の名称	発明者	権利者	産業財産権の種類、番号	取得年月日	国内・外国の別

13. 備考

研究者又は所属研究機関が作成した研究内容又は研究成果に関するwebページがある場合は、URLを記載すること。

<http://implicature.net/index-j.html>